

大学教育におけるジェネリック・スキルの 評価に関する研究

木 下 謙 朗

▶キーワード

ジェネリック・スキル
質の保証
パフォーマンス評価
ルーブリック

▼要 旨

本稿は、日本国内外の大学教育におけるジェネリック・スキルの動向を整理する。さらに、日本の大学においてルーブリックを使ったパフォーマンス評価の実践例を概観し、どのような評価観点や評価尺度を用いたルーブリックを利用し、ジェネリック・スキル育成を目指しているのかについて俯瞰し、課題を提示する。

I. はじめに

近年、日本における大学教育の現場では「質の保証」が求められ、「教員が何を教えるか」ではなく「学生が何ができるようになったか」といった学生の学習成果に焦点をあてた教育内容・方法が検討されている。これは、中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(2008年8月)と「学士課程教育の構築に向けて」(2008年12月)が提言されて以降、急速に進んでいる。21世紀型市民の育成、経済のグローバル化への対応できる人材育成、知識基盤社会を牽引する人材の育成を期待されている大学には、その人材の質保証システムが確保され、学士課程共通の学習成果(learning outcomes)を設定し、正しく測定する必要性が迫られている。

そのような中で、大学において特定の専門知識のみを獲得するのではなく、日常生活や社会

人として活躍できる能力である「ジェネリック・スキル」をどのように学生に身につけさせるかについて議論・検討されている⁽¹⁾。ジェネリック・スキルは1980年代から1990年代にかけ欧米諸国を中心に関心が高まり、現在ではキャリア教育との関連で「雇用可能性スキル (employability skills)」や「転移可能性スキル (transferability skills)」とも呼ばれているが、これらは特定の職業的知識やスキルを指すものではなく、どのような職業にも求められる、ある意味「普遍的」な基礎的資質能力であり、基礎教育と専門教育の中間に位置するものと考えられている (経済産業省 2006)。

さらに、どのような能力をどのタイミングで導入し、定着させていくかという問題に次いで、どの程度何が定着したのか質の保証を正しく評価する必要がある。「学生が何ができるようになったか」を客観的で公平な「学習成果」として評価することが、教育の現場において必須項目であることは言うまでもない。

本研究では、大学教育におけるジェネリック・スキルの動向を整理し、ジェネリック・スキルの定着を試みている大学における実践報告からその評価方法について分析し、課題を提示する。

Ⅱ. ジェネリック・スキルの動向

本章では、各国の大学教育におけるジェネリック・スキルの動向を概観したうえで、日本でのジェネリック・スキル定着の方向性を探る。

1. 各国のジェネリック・スキルの動向

ジェネリック・スキルは1980年代後半からオーストラリアやアメリカ、イギリスで関心が高まってきているが (吉原 2007)、オーストラリアでは「Key competencies」、アメリカでは「Basic skills」、イギリスでは「Core skills」と呼ばれ、国や地域によって呼び方や定義がさまざまである。

グローバル化や科学技術の進展、社会の激しい変化にともない、社会の要請に応えるべく大学教育におけるジェネリック・スキルも多様化している。

オーストラリア公立職業教育研究センター (National Centre for Vocational Education Research : NCVER) は表 1 のように Australian National Training Authority (2003) において、各国で使用されているジェネリック・スキルに関する表現をまとめている。ジェネリック・スキルを職業教育と関連させているカナダの雇用可能性 (Employability skills) やフランスの転移可能性 (Transferable skills) のような国もあれば、幅広い能力を意図しているニュージーランドの「Essential skills」やドイツの「Key qualifications」のような国もある。また、Australian National Training Authority (2003) では、多様なジェネリック・スキルの共通項目を抽出し、表 2 のようにまとめている。

各国で示されているジェネリック・スキルは、表 2 から大きく六つの要素に分類できることがわかる。読み書き、計算、パソコン等の活用を含んだ基礎的・根本的スキル、コミュニケーションやチームワークなどの対人関係スキル、情報収集や問題解決などをおこなうために必要

表1 各国における「ジェネリック・スキル」を表す用語

国 名	用 語
イギリス	Core skills, key skills , common skills
ニュージーランド	Essential skills
オーストラリア	Key competencies, employability skills, generic skills
カナダ	Employability skills
アメリカ	Basic skills, necessary skills, workplace skills, know-how
シンガポール	Critical enabling skills
フランス	Transferable skills
ドイツ	Key qualifications
スイス	Trans-disciplinary goals
デンマーク	Process independent qualifications

Australian National Training Authority (2003)

表2 「ジェネリック・スキル」 リストに見られる共通要素

要 素	内 容
Basic / fundamental skills	Literacy, using numbers, using technology
People-related skills	Communication skills, interpersonal skills
Conceptual / thinking skills	Collecting and organizing information skills, Problem-solving skills, Planning and organizing skills, Learning to learn skills, Thinking innovatively and creatively, Systems thinking
Personal skills and attributes	Being responsible, resourceful, flexible, able to manage own time, having self-esteem
Skills related to the business world	Innovation skills, enterprise skills
Skills related to the community	Civic or citizenship knowledge and skills

Australian National Training Authority (2003)

な概念的・思考スキル、また責任感や融通性があり時間管理ができるなどの個人的なスキル・特性を示す要素や、イノベーションや起業などのビジネスに関するスキル、市民としての知識やスキルなどコミュニティに関連したスキルの6要素が挙げられている。ジェネリック・スキルの共通要素をみると、大学教育に限らず、初等・中等教育から生涯教育にまで広く適用できる可能性がある。

2. 日本のジェネリック・スキルの動向

21世紀型人材育成をめぐる議論の中では、特定の専門領域に関する知識だけではなく、学んだ知識を活用し、新たな価値を生み出す能力や知識を活用するために必要な創造的思考力、問

題解決力、分析力、さらに協働する力やリーダーシップが求められていることから（川嶋 2011）、労働者として即戦力となるようなジェネリック・スキルが重視されている。また、個人が対人間関係を築き、コミュニティを形成し（久保田 2013）、より良い市民となるといった内容も昨今加えられるようになってきている。ただ、現段階でジェネリック・スキルの明確な定義はされておらず、各大学において養成する人材像を考え、ジェネリック・スキルの定義を検討していく必要性がある⁽²⁾。

そこで本節では、日本においてジェネリック・スキルはどのような意味合いで使用されているのかについて整理する。

日本の大学教育においては、中央審議会答申で述べられた方針に加え、企業や経済界からも、「就職基礎能力」や「社会人基礎力」といった力を社会への入り口となっている大学で身につけさせてほしいといった要請があり、大学は専門教育と教養教育にまたがるジェネリック・スキルの育成を余儀なくされている。これらは政策的な影響が大きい、中でも「自ら学び自ら考える力」（文部科学省 1998）、「人間力」（内閣府 2003）、「就職基礎力」（厚生労働省 2004）、「社会人基礎力」（経済産業省 2006）、「学士力」（文部科学省 2008）などの提言の影響が大きいといえる。

1998年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」では、「知的活動によって社会をリードし社会の発展を支えていくという重要な役割を担う大学等が、知識の量だけではなくより幅広い視点から「知」を総合的に捉え直していくとともに、知的活動の一層の強化のための高等教育の構造改革を進めることが強く求められる時代—「知」の再構築が求められる時代—となっていくものと考えられる」とし、21世紀に向けての大学等の多様化・個性化を後押しし、国際的に通用する人材の育成について議論されている。また、「高等教育においては、「自ら学び、自ら考える力」の育成を目指している初等中等段階の教育を基礎とし、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」（課題探求能力）の育成を重視することが求められる。さらに、自主性と自己責任意識、国際化・情報化社会で活躍できる外国語能力・情報処理能力や深い異文化理解、さらには高い倫理観、自己を理性的に制御する力、他人を思いやる心や社会貢献の精神、豊かな人間性などの能力・態度の「かん養」が一層求められる」（文部科学省 1998）とし、課題探求能力の育成と国際社会で生きていける人材育成を目指した提言がなされている。

また内閣府は2003年に「人間力戦略研究会報告書」の中で「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力」が「人間力」とであると提示している。その中で「知的能力要素」「社会・対人関係力的要素」「自己制御の要素」の三つの要素を総合的にバランスよく高めることが、人間力を高めることと定義している。

2004年に厚生労働省は若年者の就職能力に関する実態調査を11255社の企業に実施し、「若者が社会に出るにあたって最低限身に着けてほしい力」のリストを作成し「就職基礎力」として報告している。「就職基礎力」については「コミュニケーション能力」「職業人意識」「基礎学力」「ビジネスマナー」「資格取得」の五つの能力と、その下位項目として13の要素が挙げられている（表3）。これは、若年者就職基礎能力支援事業（Youth Employability Support Program）の中で、若年者の就職を支援するために取りまとめられたものであることから、グ

ローバルな競争力を持った人材育成という意味合いは薄いと考えられる。

表 3 就職基礎力

能 力	要 素
コミュニケーション能力	意思疎通、協調性、自己表現能力
職業人意識	責任感、向上心・探求心、職業意識・勤労観
基礎学力	読み書き、計算・数学的思考力、社会人常識
ビジネスマナー	基本的マナー
資格取得	情報技術関係、経理・財務関係、語学力関係

厚生労働省（2004）

経済産業省は「社会人基礎力に関する研究会」を開催し、2006年に「社会人基礎力」を「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をおこなっていく上で必要な基礎的な能力」と定義し、三つの能力「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」とそれに付した12の能力要素を定めている（表4）。これは、職場等で必要とされつつある基礎学力や専門知識に加え、「人との接触の中で仕事をする能力」が重要視されている中で、「社会人基礎力」を明確化し、産学連携を通じた育成・評価していくための枠組みづくりのために構築された経緯がある。

表 4 社会人基礎力

分 類	能 力 要 素	内 容
前に踏み出す力	主体性	物事に進んで取り組む力
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力
	実行力	目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにし準備する力
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力	新しい価値を生み出す力
チームで働く力	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力

経済産業省（2006）

2008年12月に中央審議会は「学士課程教育の構築に向けて」において、分野横断的に学士課程教育で共通して目指す学習成果（Learning Outcomes）の指針として「学士力」を提示した。「学士力」は「知識・理解」「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思

考力」の四つの観点から提示し、その中でもジェネリック・スキルを「汎用的技能」と表現し、「知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能」と定義している。汎用的技能として「コミュニケーション・スキル」「数量的スキル」「情報リテラシー」「論理的思考力」「問題解決力」の五つを挙げている（表5）。

表5 学士課程共通の学習成果としての「学士力」

領 域	カテゴリー	内 容
汎用的技能：知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能	コミュニケーション・スキル	日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる
	数量的スキル	自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる
	情報リテラシー	情報通信技術（ICT）を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる
	論理的思考力	情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる
	問題解決力	問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる
知識・理解：専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する	多文化・異文化に関する知識の理解	—
	人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	—
態度・志向性	自己管理能力	自らを律して行動できる
	チームワーク、リーダーシップ	他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる
	倫理観	自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる
	市民としての社会的責任	社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる
	生涯学習力	卒業後も自律・自立して学習できる
統合的な学習経験と創造的思考力	これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力	—

中央審議会（2008）

「学士力」は「学士課程の各専攻分野を通じて培う力。教養を身に付けた市民として行動できる能力」と定義し、「21世紀型市民」育成、グローバル化する知識基盤社会の進展の中で育成すべき学士課程教育の目標（参考指針）を共通教育と専門教育を通して培うものとして提示された。今まで大学が学生に身に付けさせようとしてきた能力と、企業側が必要としている卒業時の学生の能力にずれが生じてきていること、また大学教育の質保証を担保する必要性から、学士課程の学習成果が求められるようになってきた。

このように、日本の大学教育においてどのようなジェネリック・スキルを育成していくのかについては、企業が要求する汎用的な能力に合わせながら、大学教育としての質保証という観点からも検討すべき重要な課題となっている。

また、「質保証」を支えるための「評価」について大学間、大学内、科目担当者間などでも学習評価についても多く検討されている。そのような中で「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（2012）ではアセスメントテスト、ルーブリック、学修ポートフォリオ等の手法が取り上げられ、現在においても大学教育における学生の学習の質評価についても検討と実践が繰り返されている。

Ⅲ. アカデミック・ジャパニーズ実践におけるパフォーマンス評価

日本の大学教育において「学生が何ができるようになったか」を客観的で公平に学習成果として評価することが必須項目であることは先に述べた。その背景として、中央教育審議会（2012）の「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」で従来の三つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー）に加え、アセスメント・ポリシーの作成が求められたことが大きく関係している。これにより、各大学の学士課程を充実させるために、学習成果の具体的な評価方法として、学修時間の把握のための学修行動調査、学修到達度調査（アセスメント・テスト）、ルーブリック、学修ポートフォリオ等、どのような測定手法を用いたかを明確にする必要性が生じたのである。

本章では、近年の日本の大学において、「パフォーマンス評価」によってどのような「質」の評価がおこなわれているのか、それにはどのような「ルーブリック」が利用されているのかについて明らかにする。

1. パフォーマンス評価

本節では、なぜ学習評価においてパフォーマンス評価を取り上げるのかについて述べる。

学習評価は大きく「間接評価」と「直接評価」の二つに分けることができるが（山田 2012）、「間接評価」は質問紙調査やインタビュー等で学生の満足度や自己認識を通じて学習評価をおこなうことから、成績評価には直接反映しない。一方、「直接評価」は客観テストやレポートなどのさまざまな課題の評価によって、学修成果を直接的に評価したもので、「何ができるか」を学生に提示することになり、ポートフォリオ評価、ルーブリック評価、卒業研究等もこれらに当てはまる。実際、大学教員はこの直接評価を実践の中で多くおこない、成績評価の一助としている。その中でもパフォーマンス評価は直接評価に含まれるが、パフォーマンス評価につ

いては「ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、学習者自身の作品や実演（パフォーマンス）を直接に評価する方法」（松下 2012）や、「知識やスキルを使いこなす（活用する）ことを求めるような評価方法（問題や課題）」（西岡 2013）のように定義されている。これらの定義の多くが指標としているジェネリック・スキルには、スキルやリテラシー以外に問題解決力や論理的思考力なども含まれる。これらは知識をどのように使い、プレゼンテーションや論文等をどのように産出したのか、加えてその産出物に示されている根拠が論理的に述べられているかなどについても評価する必要がある。このように学生の概念理解の深さや知識・技能を総合的に活用し表現する能力を評価する方法がパフォーマンス評価であるが（松下 2016）、学生のパフォーマンスに対して複数の評価基準を設定し、学生がどの程度到達しているかを示す評価基準がルーブリック（Rubric）である。

2. ルーブリック

松下（2012）によると、ルーブリックとはパフォーマンス（作品や実演）の質を評価するために用いられる評価基準のことであり、一つ以上の基準（次元）とそれについての数値的な尺度、および、尺度の中身を説明する記述語からなり、基準×尺度のマトリックスで各セルの中に記述語が入るといった形式で表現されることが多いと述べられている。日本よりも先にルーブリックを大学教育機関で使用しているアメリカでは、全米カレッジ・大学協会（Association of American Colleges & Universities：AAC & U）により複数の機関での利用可能な教養教育に関するルーブリックが開発された。AAC & U が構築したルーブリックは VALUE ルーブリック（VALUE：Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education）と呼ばれ、学士課程教育における妥当な学習評価プロジェクトの一環として構築された。構築された経緯などについては吉田（2011）が詳しいが、全部で16種類のルーブリックが作成されており、①探究と分析、②批判的思考、③創造的思考、④文章コミュニケーション、⑤口頭コミュニケーション、⑥読解、⑦量的リテラシー、⑧情報リテラシー、⑨チームワーク、⑩問題解決、⑪市民参加、⑫異文化知識・能力、⑬倫理的推論、⑭生涯学習の基礎とスキル、⑮統合的学習、⑯グローバルな学習、に基本学習成果として大別されている。アメリカの大学では、これらのルーブリックをローカライズし、個々の大学・学部・学科、科目で使用している。日本では VALUE ルーブリックのように大学間で共有されているメタ・ルーブリックの開発はまだ少ないが、特定の大学内で共有されるコモン・ルーブリックや、個々の授業科目で用いられる科目ルーブリック開発は、最近よく耳にするようになってきた。

Ⅳ. ルーブリックを利用したパフォーマンス評価

昨今、大学の中ではジェネリック・スキル育成に力を入れ、特に初年次から PBL（Problem Based Learning / Project Based Learning）や文章表現などの科目を取り入れている機関が増えている。また、これらの科目を評価する際、評価観点や学習成果を可視化するためにルーブリックを活用している機関や担当教員も増加している。そこで、本章では、日本の大学においてルーブリックを使ったパフォーマンス評価の実践例の動向を概観し、どのようなジェ

ネリック・スキルの育成を目指し、どのようなルーブリックが利用され、どのような評価観点
が提示され、どのような評価尺度を設定して評価しているのかについて概観する。ジェネリッ
ク・スキル育成の実践を概観し、教育の構成要素と評価項目・方法を知ること、現在の大学
教育機関が必要と考えているジェネリック・スキルの要素を把握し、新たな評価指標を考える
一助になると思われる。

1. 調査対象

調査対象の実践報告は、23編（構成要素抽出の対象実践報告書一覧参照）のうちからルー
ブリックを使用した実践35例である。35の実践の中で個々の授業科目でルーブリックを用いて
いる実践を表6-1、VALUE ルーブリックのようなメタ・ルーブリック、コモン・ルー
ブリックを大学内外で共有している実践を表6-2に示す。

表6-1 科目ルーブリック一覧

記号	大学	科目群	課 題	科目名	評 価 観 点	評価 尺度	特 徴
S-1	立命館 大学	共通教 育	中間・最終 プレゼン テーション	教養ゼ ミナール	7項目：①言語情報、②聴覚情報、③視覚情報、④ メディア利用、⑤理解度、⑥関心度、⑦定着度	3段階	パフォー マンス評価、 自己・他者 評価
S-2	長崎大 学教育 学部	教育学 部	記事の分析、 企画立案、 取材・編集 作業、プレ ゼンテー ション	情報メ ディア 論	7項目：①表現分析、②内容分析、③ねらい（内容 と表現）、④活動計画、⑤取材活動、⑥編集作業、 ⑦プレゼンテーション	4段階	教師・学習 者、観察者 によって構 築
S-3	新潟大 学歯学 部	初年次	レポート	大学学 習法	6項目：①背景と問題、②意見と結論、③根拠・情 報、④異なる意見の検討、⑤全体構成、⑤表現ルー ル	3段階	十字モデ ル・ルー ブリック
S-4	山口大 学	教養教 育	科目として の到達目標	芸術論 特殊講 義	5項目：①企画趣旨に対する自らの考えを述べるこ とができる、②正確な美術史の用語を用いることが できる、③作品の特徴を適切に指摘することができる、 ④論理的な説明ができる、⑤誤字脱字がなく、 段落も明確で読みやすい文章を書くことができる	4段階	最終的な成 績評価で使 用、加点法
S-4	山口大 学	教養教 育	レポート	現代の 教育	5項目：①取りあげたテーマに関して自らの考えを 述べている、②根拠に基づき、論理的な説明ができ ている、③引用文献、参考文献を明示し、自らの意 見と区別している、④誤字脱字がなく、段落も明確 で、読みやすい文章、文章量が適切である、⑤ 「だ・である」体で統一して書かれている	5段階	最終的な成 績評価で使 用、加点法
					4項目：①情報検索（ウェブを用いて主張に必要な		教員評価と

S-5	京都外国語大学	初年次	プレゼンテーション	情報技術の実践	情報を的確に集めることができる) ②内容(ワードの機能を活用し、自分の主張を論理的に示すことができる) ③表現力・デザイン力(パワーポイントの機能を活用して効果的な表現ができる)、④コミュニケーション(聴衆にわかりやすいよう発表することができる)	3段階	自己評価 学習者自身がルーブリックを作成
S-6	青山学院大学	初年次	論文(4000字程度)	基礎演習	6項目: ①問題の設定、②問題の説明、③問題の背景、④問題の重要性、⑤問題の相対化、⑥文献の利用	4段階	教師
S-7	山口県立大学	初年次	レポート	基礎セミナーⅠⅡ	5項目: ①書式、②構成、③事実と意見の区別、④資料情報収集・参考文献、⑤文体・誤字脱字	3段階	評価者間(教師)

表6-2 メタ・コモンルーブリック一覧

記号	大学	科目群	課題	評価観点	評価尺度	特徴
C-1	創価大学	共通科目	学術文章作法Ⅰ(全学共通)	13項目: ①テーマの背景、②問題提起(視角)、③3つの論点の設定、④パラグラフ・ライティング、⑤事実の提示、⑥全体の簡潔なまとめ、⑦自分の考え、⑧全体の一貫性、⑨表記、⑩学術的な表現、⑪文の適切さ、⑫引用、⑬参考文献リスト	3段階	コモンルーブリック レポート評価・ルーブリック 初年次共通シラバス、(全学1年次必修)
C-1	関西国際大学	KUIS 学修ベンチマーク	学修到達目標	大項目5項目: ①自立できる人間になる、②社会に貢献できる人間になる、③心豊かな世界市民になる、④問題解決能力を身につける、⑤コミュニケーション能力を身につける 中項目12項目: ①知的好奇心、②自律性、③規範遵守、④社会的能動性、⑤多様性理解、⑥共感的態度、⑦情報収集・活用能力、⑧問題発見力、⑨論理的思考／判断力、⑩計画・実行力、⑪自己表現力、⑫意見交換・調整力	4段階	ベンチマーク 大学間連携共同教育推進事業、淑徳大学、北陸学院大学、くらしき作陽大学の出向教員と
C-2	新潟大学歯学部	PBL (問題解決学習)	PBLにおける問題解決能力ワークシート	6項目: ステップ1: ①問題発見、②解決策の着想、③学習課題の設定、ステップ2: ④学習結果とリソース、⑤解決策の検討、⑥最終解決策の提案	4段階	トリプルジャンプルーブリック ステップ1、2 必修(2～3年)
C-3	新潟大学歯学部	PBL (問題解決学習)	ロールプレイ	4項目: ⑦-1 追加の情報と収集(追加情報の収集と問題の再把握)、⑦-2 情報の統合(追加情報の統合と解決策の内容修正)、⑦-3 共感的態度(相手への共感)、⑦-4 コミュニケーション(相手にあわせた解決策の表現)	4段階	トリプルジャンプルーブリック ステップ3 必修(2～3年)
C-4	山口大学	初年次	山口と世界	5項目: ①発見する、②はぐくむ、③形にする、④分かち合う、⑤振り返る	4段階	コモンルーブリック
			初年次ゼミ	3項目: ①自己分析: 自分の履歴を振り返りながら、		卒業用ルーブリックを簡素化

C-5	名古屋商科大学	初年次	キャリアレポート（未来の履歴書）	好み／嫌いや、得意／不得意などを掴み表現できる、②将来希望：未来のなりたい自分をキーワードで挙げて、そのキーワードについて調べられる、③結び付け：自己分析と将来希望の両者を結び付けて具体的に論じられる	3段階	卒業年次ゼミの評価で導入していた「卒論ループリック（8分野16観点5水準）を参考
C-6	山形大学	初年次	フィールドワーク共生の森もがみ	4項目：質問1：評価基準に示された活動がどの程度できるようになったか、質問2：「1」の成果に対して、評価基準を知り参照枠にしながら現地で活動することが、どの程度役にたったか、質問3：「1」で示した成果の他に、評価基準が現地での活動にどのような影響を与えたか、質問4：評価基準の提示時期は、いつがよかったか	質問1～3：5段階、質問4：選択肢で解答	地域住民と教員が協働で評価基準を開発・活用
C-7	東北学院大学	初年次	初年次生に求められる一般的なスキル	28項目：①意見や話の聞き方、②メモの取り方、③議論の仕方、④司会者の役割、⑤質問への回答、⑥発表時間、⑦発表の仕方、⑧テーマ設定や問題の絞り込み、⑨事実と意見、⑩1文の文字数、⑪説得力のある主張や書き方、⑫レポートの構成、⑬文体、⑭推敲、⑮引用の仕方、⑯参考文献の表記、⑰必要な情報（授業名・発表日・表者名・タイトル等）、⑱情報の信頼性や質、⑲文献リストの作成、⑳図書の見つけ方、㉑貸出方法、㉒各種サービス（レファレンス・複写・相互貸借）、㉓複写サービス、㉔OPAC、㉕テキストの読み方（精読・速読・クリティカルリーディング）、㉖疑問点やわからない用語、専門用語、㉗キーワードやキーセンテンスの見つけ方、㉘まとめかた、㉙段落間のつながり	明記無し	アカデミックスキル・ループリック 初年次生の獲得したスキルを測定するループリック開発
C-7	東北学院大学	初年次	人間科学基礎演習A	12項目：①意見、②質問、③話し方、④説得力、⑤引用、⑥一貫性、⑦情報入手、⑧文献検索、⑨情報批判、⑩用語検索、⑪区別、⑫理解説明	5段階	基礎演習Aに必要とされるスキル
C-8	三重大学	全学	就学達成度	4項目（下位項目含め18項目）：①感じる力、②考える力、③コミュニケーション力、④生きる力	6段階	大学生の全学教育目標の達成度測定用にループリックを作成
C-9	関西国際大学	教養教育	大学学士課程に必要な情報リテラシー	6項目：①目的の明確化、②情報の検索、③情報の収集・管理、④情報の加工、⑤分析・評価、⑥情報の発信	3段階	モデルループリック 大学学士課程教育において必要な情報リテラシー
C-10	弘前大学	教養教育	地域学ゼミナール	6項目：①学部横断チームの一員として自分の役割を認識し行動できる、②学部横断チームの一員として他者の役割を判断し適切に働きかけることができる、③地域の問題に関する資料（情報）の検索・収集・整理ができる、④発表会で適切な行動ができる、⑤地域が有している課題を発見できる、⑥地域が有している課題に対し、解決策を提案できる	5段階	受講者と教員、TA全員がチーム単位に評価

C-11	広島文教大学	全学	レポート作成 共用 コモン ループ リック	3項目：①課題に対する内容、②論理的な説明、③文章表現	4段階	コモンループリック
C-11	広島文教大学	全学	発表用 コモン ループ リック	2項目：①内容の構成、②情報の伝達	4段階	コモンループリック
C-11	広島文教大学	全学	特別活動指導 法 I レ ポート 評価 ループ リック	5項目：①与えられたテーマから疑問や問題を見いだしている、②自分の考えをもち、その考えを支える情報を踏まえ、最終的な結論を導いている、③自分の考えを支える情報（資料や根拠）を適切かつ効果的に選択し、論理的に自分の考えを述べている、④話題の選択から結論に至る過程を的確に説明している、⑤文法に沿った正しい日本語を用いて適切にレポートを作成している	4段階	コモンループリック のローカライズ
C-12	北海道教育大学 札幌校	初年次	アカデミッ クスキル	10項目（大項目4項目）：①レジュメの基本的形式、②テキストについての構成表、③テキストについての要約文、④情報の付加	4段階	①要約文型のレジュメ作成についてのループリック
C-12	北海道教育大学 札幌校	初年次	アカデミッ クスキル	6項目（大項目2項目）：①レジュメの基本的形式、②情報の取捨選択と視覚的効果の工夫	4段階	②図解型のレジュメ作成についてのループリック
C-12	北海道教育大学 札幌校	初年次	アカデミッ クスキル	13項目（大項目10項目）：①レポートの基本的形式、②提出期日および添削指導、③テーマ設定について④序論、⑤事実の意見の区別、⑥引用文についての理解、⑦結論、⑧図表、⑨脚注、⑩引用文献表	4段階	③レポート作成についてのループリック
C-13	関西大学	共通教養	文章をみがく	6項目：①教員の課題意図の理解、②資料の取扱、③自分の立場・意見、④論理構成、⑤学術的な作法、⑥日本語の表現	4段階	コモンループリック 2000字程度の論証型 レポート
C-14	京都産業大学	PBL （問題 解決学 習／課 題解決 型学 習）	PBL1、 PBL2、 PBL3 （1年次～ 3年次）	11項目：①チームメンバーのチームへの話し合いへの貢献度についての観察・推定スキル、②チームメンバーのチームへの貢献の促進についての観察・推定スキル、③チームメンバーの建設的なチームの雰囲気醸成についての観察・推定スキル、④チームメンバーの対立への対応についての観察・推定スキル、⑤チームメンバーの話し合い以外の場での個人的貢献に関する観察・推定スキル、⑥自分自身のチームへの話し合いへの貢献度についてのモニタ・コントロールスキル、⑦自分自身による他のメンバーのチームへの貢献の促進についてのモニタ・コントロールスキル、⑧自分自身の建設的なチームの雰囲気醸成についてのモニタ・コントロールスキル、⑨自分自身の対立への対応についてのモニ	4段階	コモンループリック ヒューマンスキル （豊かな人間的能力）、 コンセプチュアルス キル（概念的・論理 低能力）、ジェネ リックスキル（技術 的・実践的能力）で 構成されている「根 幹的な実力」の余生

				タ・コントロールスキル、⑩自分自身の話し合い以外の場での個人的貢献に関するモニタ・コントロールスキル⑪内発的動機づけ		
C-15	長崎大学	共通教養	レポート作成用	5項目：①課題に対する記述、②論理的公正、③レファレンス資料（着想を得たものや自分の考えを支持するための先行研究や文献、データ）、④文章の体裁：(1) 段落が適切に作られている、(2) 句読点の付け方が適切である、(3) 主部と述部の対応にねじれない、(4) 文体が統一されている、⑤表現の推敲：(1) 同じ言葉の繰り返しや多用がない、(2) 誤字・脱字がない、(3) 仮名使い・送り仮名の誤りがない、(4) 専門用語を正しく用いている	6段階	コモンルーブリック 4つの力に対応した 学修活動と評価方法 1：学ぶ力、2：考える力、3：関わる力、4：表現する力
C-15	長崎大学	共通教養	プレゼンテーション用	5項目：①体系化、②言語、③話し方、④資料、⑤メインメッセージ	4段階	
C-16	関西大学	基礎演習	プレゼンテーション用	4項目：①論点・論理的構造の明確さ、グループ発表の達成度、③声の聞き取りやすさ、④時間の管理	4段階	コモンルーブリック
C-1	創価大学	共通科目	アセスメント科目	明記無し	明記無し	自己評価ルーブリック 1年次必修
C-1	淑徳大学	看護栄養学部看護学科	実習	明記無し	明記無し	ルーブリックの作成を学生と共有 実習ルーブリック
C-1	淑徳大学	機関学部学科学生個人	明記無し	明記無し	明記無し	コモンルーブリック (連携校) 学士力ルーブリック (機関) 教室外プログラム ルーブリック (各学科)
C-1	関西国際大学	機関	ライティング、リサーチ、プレゼンテーション	明記無し	明記無し	コモンルーブリック

2. 結果と考察

各実践で使用しているループブックを分類別に整理すると、科目ルーブリックを利用している実践例は8例（表6-1）、大学内で共有、または大学間で共有しているコモン・ルーブリック、

メタ・ルーブリックを共有している実践例は27例（表6-2）であった。科目ルーブリックは初年次におこなわれる科目が多く、教師と学生が協働で構築し、評価も教員だけでなく学生自身や他者評価などをおこなっている例もみられた。一方、メタ・コモンルーブリックは初年次や教養教育の中での科目で活用されている場合が多いが、C-2、C-3、C-14のように複数年の長いスパンで利用する例もみられた。どのようなジェネリック・スキルをどの時期に定着させたいかというカリキュラム・ポリシーにもよるが、学部や大学内で共通した意識を持ち、三つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー）に基づいた共通した評価の確保に取り組んでいる結果であるようにみえる。

各科目の実践で目指しているジェネリック・スキルの中で、どのようなパフォーマンスに対してルーブリックを用いているのか観察すると、科目ルーブリック、メタ・コモンルーブリックのほとんどに共通し、レポートや論文、プレゼンテーションの実践について利用していることがわかる。ルーブリックの種類別にみると、科目ルーブリックにおいては思考の方法（Ways of thinking）についての評価観点が多く、メタ・コモンルーブリックでは、思考の方法に加えコミュニケーションやコラボレーションといった対人間関係能力に関する評価観点が多くみられた。しかし、文部科学省（2008）が提示した学士力に含まれるジェネリック・スキルがバランスよく組み込まれている評価観点を示しているルーブリックは1例もなかったが、C-1（関西国際大学）はその中でもバランスよく項目を設定している。また、「数量的リテラシー」を評価項目に提示し評価しているルーブリックは見当たらなかった。

評価尺度の基準については、それぞれの評価観点につき3～6段階程度の単純な尺度によって評価する例が多くみられ（29例）、中でも4段階で評価をしているものが約半数の17例を占めていた。評価の基準を「大変すばらしい」「おおむね満足」「改善が必要」などの3段階で10点満点の計算をするケースや（S-1）、単純に0～3点で点数をつけるケース（C-11等）も観察された。一方、文章作法という科目の「テーマの背景」という評価項目について、「テーマの背景や現状、その重要性について適切に言及している」「テーマの背景や現状、その重要性について言及しているものの、不十分な点がある」「テーマについての背景や現状、その重要性について言及できていない」などのように、尺度に示された評点をそれぞれ記述し、評価基準表を示しているルーブリックも存在した（C-1：創価大学）。しかし、記述語を用いたルーブリックを提示している実践例は6例（科目ルーブリック2例：S-6・S-7、メタ・コモンルーブリック4例：C-1・C-8・C-10・C-14）で全体の2割にも満たない。パフォーマンスに対する評価を総括的評価として利用する際には、数値で算出するほうが教員にとって単純でかつ時間的にも短縮できると思われる。しかし、ジェネリック・スキルの定着を図ることを考えると、現時点で「何ができていて、何ができていないのか」を「記述語」を用いて具体的に示すことで学生の学びにつながってくる。プレゼンテーションやレポートの最終評価を提示するだけでなく、このパフォーマンスでは何ができていないのか、何をすれば次のステップに進めるのかということを具体的に提示することで、ジェネリック・スキルの養成、学生の自律的な学習の育成にもつながってくると思われる。また、初年次教育など大人数の学生に対し複数の担当者が同一科目を担当する場合、記述語で示されたルーブリックを利用することで、担当者による評価の差を減らすためにも非常に有効であると考えられる。

V. おわりに

大学教育は社会の変化に対応し、質的な転換が必要とされており、それにともない大学教育における質の保証が求められている。中でも、大学で学ぶ専門知識に加え、社会で活躍するために必要なジェネリック・スキルの育成とその評価が議論・検討されている。本稿では、ジェネリック・スキル育成を概観するとともに教育の構成要素を知ることで、現在の大学教育機関が必要と考えているジェネリック・スキルの要素を把握し、その評価方法で使用されているルーブリックの使用状況について俯瞰した。

日本国内外の大学教育において質の保証が求められ、また必要とされるジェネリック・スキルが呼び名は異なっている、共通している分野がみられた。各国においては、基礎的・根本的スキル、対人関係スキル、概念的・思考スキル、個人的なスキル・特性、ビジネスに関するスキル、市民としての知識やスキルなどコミュニティに関連したスキルの六つのスキルが共通していた。日本では、2008年に中央審議会答申の中で示された「学士力」にある「汎用的技能」を強く意識した大学が多くみられた一方で、すべてをみだしている大学・科目は見当たらなかった。

また、大学内外で共有したメタ・コモンルーブリックを使用している大学が多い一方で、ジェネリック・スキルの要素に偏りのある評価観点を提示している機関も多くみられた。科目ルーブリックよりもメタ・コモンルーブリックを活用した実践が多く報告されていたが、実際の現場は科目ルーブリックを科目担当教員が構築し、利用しているケースが多いと思われる。学部や大学単位でルーブリックを構築する機関はまだ少ないが、その取り組みは論文として発信している。他方、科目を単独で任されている教員（非常勤含む）も担当科目の評価の平等性、透明性のためにルーブリックを授業に取り入れている。しかし、到達目標や評価項目は所属している大学の三つのポリシーに基づいており、ジェネリック・スキルの要素を均質に考慮したルーブリックを構築している一教員は少なく、自身の採点の時間的経済性を考慮したものが多数を占めていると考えられる。今後は、各大学が三つのポリシーからジェネリック・スキルの定義を定め、目的、指導（活動）、評価、の一貫性と質保証を実現させていく必要があり、加えてその発信も重要な役割を担っている。

参考 構成要素抽出の対象実践報告書一覧

番号	資料 記号	論文名	著者名	発行雑誌	ページ	公刊年	巻号
1	C-1	ルーブリックの組織的導入と活用について	藤木清・川嶋太津夫・ 関田一彦・芹澤高斉・ 小林至道	大学教育学会誌	101-106	2015	第37巻 第2号
2	C-2	PBLにおける問題解決能力の 直接評価—改良版トリプル ジャンプの試み—	小野和宏・松下佳代・ 齋藤有吾	大学教育学会誌	123-132	2014	第36巻 第1号
		学習成果としての能力とその評					

3	C-3	価値ルーブリックを用いた評価の可能性と課題—	松下佳代	名古屋大学高等教育研究	235-255	2014	第14号
4	C-4	山口大学におけるケース・スタディー質保証のためのマネジメントに着目して—	林透	大学教育学会誌	45-50	2015	第37巻 第1号
5	C-5	学士課程教育における共通教育の質保証—評価データの併用と質保証のマネジメント—	山田礼子・森利枝・ 亀倉正彦・斎藤有吾・ 高野篤子	大学教育学会誌	96-100	2015	第37巻 第2号
6	C-6	サービス・ラーニングにおける現地活動の質の向上—地域住民と大学教員による評価基準の協働的開発—	杉原真晃・橋爪孝夫・ 時任隼平・小田隆治	日本教育工学会 論文誌	341-349	2015	Vol 38 NO. 4
7	C-7	アカデミックスキル・ルーブリックの開発—初年次教育におけるスキル評価の試み—	葛西耕市・稲垣忠	東北学院大学教育研究所報告集	5-29	2012	第12号
8	C-8	ルーブリックによる大学生の就学達成度評価	中島誠・中西良文・ 南学	日本教育心理学会	465	2012	第54回
9	C-9	クラウド時代を見据えた学士課程教育において必要な情報リテラシーについて（最終報告）	山下泰生・陳那森・ 窪田八洲洋	教育総合研究叢書	75-96	2014	第7号
10	C-10	平成28年度からの地域学ゼミナールの導入について	藤崎浩幸	21世紀教育 フォーラム	45-51	2016	11
11	C-11	広島文教女子大学におけるコンルーブリック開発と実践的展開	今崎浩	広島文教女子大学高等教育研究	9-28	2016	2
12	C-12	アカデミックスキルについてのルーブリック構築の試み：北海道教育大学札幌校芸術体育教育専攻音楽教育分野の事例をもとに	石出和也	北海道教育大学 紀要教育科学編	343-358	2016	67(1)
13	C-13	「授業連携によるクラスルーブリック作成過程の事例	毛利美穂・ 西浦真喜子・ 小林至道・中澤務・ 森朋子	大学教育研究 フォーラム	300-301	2015	第21回 大学教育研究 フォーラム
14	C-14	授業実践者のヒアリングデータに基づく PBL ルーブリックの開発—京都産業大学 PBL 科目を例として—	松尾智晶・中沢正江	高等教育フォーラム	37-44	2014	Vol. 4
15	C-15	授業内におけるルーブリック	川越明日香	大学教育学会		2016	大学教育学会 第38回

							大会配布資料
16	C-16	学習成果をどう評価するか？—評価課題とルーブリックの開発—		第14回関西大学FDフォーラム		2015	配布資料
17	S-1	学生参画型授業モデルの開発に関する実証研究 (3)	藤本光司・林徳治・沖裕貴	日本教育情報学会	120-123	2009	25
18	S-2	ルーブリックの構築により自己評価を促す問題解決学習の開発	寺嶋浩介・林朋美	京都大学高等教育研究	63-71	2006	12
19	S-3	レポート評価におけるルーブリックの開発とその信頼性	松下佳代・小野和宏・高橋雄介	大学教育学会誌	107-115	2013	第35巻第1号
20	S-4	大学におけるルーブリック評価導入の実例	沖裕貴	立命館高等教育研究	71-90	2014	14
21	S-5	初年次教育における自律的な学習を促すルーブリックの活用	遠海友紀・岸磨貴子・久保田賢一	日本教育工学会論文誌	209-212	2012	第36号
22	S-6	ワークシートの利用に着目した論文発展プロセスの分析	小林至道・杉谷祐美子	大学教育学会誌	96-104	2012	第34巻第1号
23	S-7	複数教員によるレポート評価のためのルーブリック形式の評価表導入に関する検証	池田史子・畔津忠博	日本教育工学会論文誌	153-156	2012	第36号

＊本稿は、2017年2月11日に AJG 第41回研究会でポスター発表した内容を大幅に加筆修正したものである。また、JSPS 科研費課題番号15K02647（研究代表者：木下謙朗）の助成を受けたものである。

註

- (1) 専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（Generic Skills）を定量的に把握するテストに学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同開発した PROG（Progress Report on Generic Skills）テストがある。PROG テストには「リテラシーテスト」と「コンピテンシーテスト」の二つがあり、知識を活用し問題解決する力の「リテラシー」と、経験から身につく行動特性の「コンピテンシー」の二つの観点でジェネリック・スキルを測定している（<http://www.kawai-juku.ac.jp/prog/>、http://www.riasec.co.jp/prog_hp/）。
- (2) 文部科学省（2016）は、各大学で三つのポリシーを一体的に策定し、体系的で組織的な大学教育を展開し、その結果の点検・評価を通じた不断の改善に取り組むことにより、学生の学修成果を向上させ、学位授与にふさわしい人材を育成し、社会へと送り出すことを求めている。これにより、各大学の三つのポリシーをベースとしたジェネリック・スキル構築が求められている。

参考文献

- 川嶋太津夫（2010）「ジェネリック・スキルとアセスメントに関する国際動向」『学士課程教育のアウトカム評価とジェネリックスキルの育成に関する国際比較研究』pp. 155-160
- 川嶋太津夫（2011）「大学生のジェネリック・スキルを育成・評価するために」2011年度 PROG セミナー資料
- 久保田祐歌（2013）「大学におけるジェネリック・スキル教育の意義と課題」『愛知教育大学創造開発機構紀要』

3号 pp. 63-70

経済産業省 (2006)「社会人基礎力に関する研究会—「中間取りまとめ」—」

厚生労働省 (2004)「『若年者の就職能力に関する実態調査』結果」

坂井和貴、中平勝子、北島宗雄 (2016)「知識基礎社会への適用促進に向けたジェネリックスキル成長推定」研究報告教育学習支援情報システム (CLE) 2016-CLE-18 pp. 1-6

清水禎文 (2012)「ジェネリック・スキル論の展開とその政策的背景」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第61集・第1号 pp. 275-287

内閣府 (2003)「人間力戦略研究会報告書」

西岡加名恵 (2013)「パフォーマンス評価とは何か」「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」(第2回・参考資料)

文部科学省 (1998)「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」大学審議会答申

文部科学省 (2002)「新しい時代における教養教育の在り方について」中央教育審議会答申

文部科学省 (2008)「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申

文部科学省 (2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—」中央教育審議会答申

文部科学省 (2016)「『卒業認定・学位授与の方針』(ディプロマ・ポリシー)、『教育課程編成・実施の方針』(カリキュラム・ポリシー)及び『入学者受入れの方針』(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン」中央教育審議会大学分科会大学教育部会

濱名篤 (2010)「ジェネリックスキルの育成とアウトカム評価」

松下佳代 (2007)『パフォーマンス評価』日本標準

松下佳代 (2012)「パフォーマンス評価による学習の質の評価—学習評価の構図の分析にもとづいて—」『京都大学高等教育研究』第18号 pp. 75-114

松下佳代 (2013)「『新しい能力』と学習評価の枠組み」育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会 (第2回) 資料

松下佳代 (2016)「『新しい能力』と学習評価」関西大学アクティブ・ラーニングセミナー

森田佐知子 (2015)「学士課程教育を通じたジェネリックスキル育成に対する評価の課題—豊橋創造大学「地域産業界連携教育力改革プロジェクト」の事例から—」『豊橋創造大学紀要』19号 pp. 1-13

安田孝・野口理英子・直井玲子 (2016)「アクティブラーニングの反復がジェネリックスキルの変化に及ぼす影響—Project-based Learning 型授業を用いた検討—」『松山東雲女子大学人文科学部紀要』24巻 pp. 43-56

山田礼子 (2012)『学士課程教育の質保証へむけて 学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂

吉田武大 (2011)「アメリカにおけるバリエールブリックの動向」『関西国際大学教育総合研究所研究叢書』4号 pp. 1-12

吉原恵子 (2007)「大学教育とジェネリックスキルの獲得—ジェネリックスキルをめぐる各国の動向と課題—」『兵庫大学論集』12 pp. 163-178

Australian National Training Authority (2003) Defining Generic Skills : At a Glance. National Centre for Vocational Education Research Ltd.

AAC & U VALUE RUBRIC のサイト [<http://www.aacu.org/value/rubrics/>]